

海と台地につながる、文化の中心「西郷」

設計主旨 ①

隠岐の玄関口であり北前船の寄港地として発展し、昭和40年代の観光ブームで栄えた西郷港界隈。観光ブームの終わりと車社会の拡大による商業中心地の移転により、近年は昔ほどの賑わいがなくなっています。交通機能の整備と共に、昔から島外との結節点として、経済・文化の中心地であったこの地に賑わいを取り戻し、島後の良さを感じられる場所とするために、このエリアを「文化と景観の場」とし、文化を中心とした賑わいと日常生活で西郷の特徴的な地形を感じられるシーンを創出します。



隠岐広場を中心とする計画地の鳥瞰図

■文化

文化のつながりの場を作り出します。北前船は経済と共に様々な文化を島にもたらし、西郷は文化の玄関口でもありました。また、かつてはオリエンタル劇場やボウリング場などがあり、住民の方々の文化や交流の場でした。文化の玄関口・中心地であったこのエリアを文化・交流の中心地と位置づけ、島と島外の文化それぞれが混ざりあい、交流し発展していくように整備します。

■景観

西郷や島後を日々感じられるシーンをつくりだします。西郷の特徴的な地形である、「愛宕山と金峯山に挟まれた西郷湾入口」と「大城台地」。それらをつなぐ新しい景観軸をつくり、まちと海をつなげます。広場であそんだり、買い物したり、車で通ったりという日常生活の中で、島後を感じ島に愛着が湧くような景観軸を整備します。

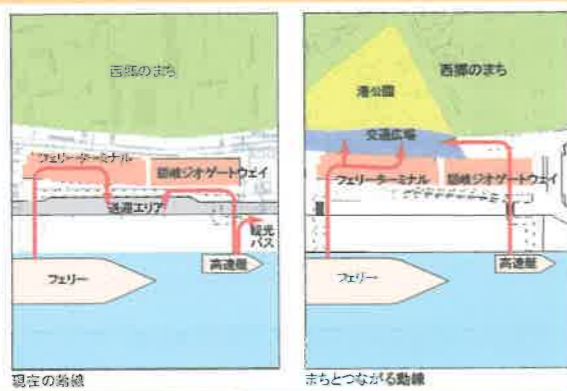


大城台地

西郷湾入口

まちとつながる交通計画 ②

来航者や帰島者が西郷のまちを感じられるように交通を整備します。現在は、海側に送迎者のスペースがあったり、高速艇降り場のすぐ近くに観光バスが停まっていたり、フェリーや高速艇を降りた方がまちを感じることもなく、目的地に向かう動線となっています。この計画では、フェリーターミナルのまち側のみを変え、交通広場を整備します。送迎車スペース・観光バス乗降場・タクシー乗り場がまち側にくることによって、来航者や帰島者は島後の山々の後線や大城台地、西郷のまちを最初に感じ、それから目的地に向かうようになります。交通広場は、景観軸に沿って整備される港公園（仮称）の一部です。送迎車スペース等も広場内の「つながりの道」を利用します。「つながりの路」は原則フェリー等の発着前後30分からしか入れない、歩行者優先の道路です。



現在の路線

まちとつながる動線



フェリーターミナル1F出口からの眺め



フェリーターミナル1F出口からの眺め

提案書中の丸番号は、下記の記載項目に対応しています。

- ①: 設計主旨 ②: エリア全体の機能配置図 ③: 交通機能に関する整備方針 ④: 交流機能に関する整備方針 ⑤: 商業機能に関する整備方針 ⑥: 暮らしの機能に関する整備方針 ⑦: 景観形成の方針
- ⑧: 西郷港周辺地区デザイン図 ⑨: 各機能の連携を深めるための手法に関する提案 ⑩: 整備する施設の利用や運営に対する提案 ⑪: にぎわいを演出する手法などの提案 ⑫: その他の提案

自然とつながる全体計画 ③

新しい景観軸を中心にまちを変え、隠岐の自然とつながる様々なシーンが散りばめられた全体計画です。フェリーターミナルに隣接して、様々な広場を持つ大きな港公園を整備します。交通整備の基の「交通広場」や文化の中心を担う「隠岐広場」などが含まれます。公園が中心となることで、エリア内から大城台地や山の後線などが視認しやすくなります。また、景観軸に沿って海に抜ける公園と通りにより、まちと海が近づき、海を感じることでまちとなります。

ゾーニング

港公園内と大社前のエリアに商業ゾーンを配置します。あんき市場やフードコートを開いた公園内のメイン商業施設は景観を配慮した平屋の建物です。住宅地に近い、目貫通り側の区画とウェルネス側の区画に住宅ゾーンを配置します。住宅は西郷のまちなみやつながりを受け継ぐ集合住宅です。

地域をつなげる景観軸 ④ ⑦ ⑧

大城台地と西郷湾入口をつなげる景観軸に沿って新目貫通りと港公園を連携し、まちと海をダイレクトにつなげます。様々な広場を持つ港公園は、子供からお年寄りまで、誰でも居場所を見つけられる公園です。大城台地や西郷湾入口といったこの地区の特徴的な景色をみながら遊んだり、寛いだり、お喋りしたりできます。ビューポイントプラザやお魚センターも景観軸沿いとなるため、景観軸を通してフェリーターミナル・港公園・ビューポイントプラザ・お魚センターがつながり、一体感をもった地域となります。また、大城台地や山々の後線が見えるように新目貫通りに面する建物は2階部分をセットバックさせ、自然とまちを繋ぐスカイラインを構成しています。



景観軸の新目貫通りから大城台地方向を望む



景観軸の新目貫通りから西郷湾方向を望む

文化をつなげる隠岐広場 ④ ⑤ ⑦

大階段や大屋根を持つ港公園内の隠岐広場が文化や人をつなげます。島内の文化や人をつなげるイベント（隠岐古典相撲、フリーマーケット、お祭りなど）だけでなく、島外の文化に触れることのできるイベント（屋外シネマ、屋外寄席、音楽フェス、キッチンカーによる食イベント、アーティストによるワークショップなど）を開催することができ、島内と島外の文化交流の場所となります。また、景観軸沿いのシェルター下に3か所のチャレンジスペースを設けます。島の内外問わず、何か新しいことを始めたい人のためのスペースです。日常では、子供たちが安全に自由に走り回れる広場です。大人は大階段で座って子供たちが遊ぶのを眺めたり、大屋根の下で将棋をしたり、みんなで集まってラジオ体操をしたりできる場所です。



広場を挟んで大階段と大屋根のある文化の中心隠岐広場

高速艇からのアクセス ③

高速艇を降りた方は、ジオゲートウェイを通り抜けてまちに出ます。現在は通りにも目印も何もなく、どこに行けば良いかわからなくなっています。港公園・交通広場を作ることで、ジオゲートウェイの出口からも視認しやすく、判りやすい動線となります。



隠岐ジオゲートウェイ出口から視認しやすい交通広場

港公園 ④ ⑤ ⑧

様々な広場を持ち、子供から中高生、大人、高齢者まで、誰でも自分の場所を見つけられる、海と台地をつなぐ公園です。フェリーターミナル前の広場や大屋根はフェリーの第二の特合場所となります。隠岐の食文化を感じられるあんき市場中心の商業施設と一体となり、地元の方も来航者も一緒にくつろげる場所です。フェリー利用者にとっての憩いの場にもなるため、乗船等の案内は公園全体に放送されます。



北広場 ④ ⑤ ⑧

メイン商業施設とダイレクトにつながる、落ち着きのある広場です。

チャレンジスペース ⑤

島の内外問わず、新しいことにチャレンジする人のためのスペースです。普段は半屋外ですが、備え付け収納内の建具を設置することで、屋内化可能な場所です。



出雲大社分院参道 ⑤ ⑧

昔から西郷を見守ってきた出雲大社分院の前に参道を設け、出雲大社と景観軸・港公園を繋ぎます。



交通広場 ③

フェリーターミナル利用者の交通の拠点を集約した広場です。

つながりの路 ③ ④

送迎車、観光バス、タクシーのための路です。歩行者優先の道路で、フェリー発着の前後30分以外は港公園と一体となる歩行者専用道路です。仕上げは西郷公園下の坂道のような黒磁石洗い出しの仕上げとします。



西郷公園下の黒磁石ロード

まちのリビング ④ ⑥ ⑧

メイン商業内にある、誰でも使える憩いの場です。

住宅ゾーン

大城台地

北広場

住宅ゾーン

港公園

交通広場

まちのリビング

フェリーターミナル

町営駐車場1

町営駐車場2

お魚センター

ビューポイントプラザ

出雲大社分院

大屋根広場

健康広場

おさかな広場

西郷火災記念碑

町営駐車場2

隠岐汽船貨物

シェルター

町営駐車場1

フェリーターミナル

ビューポイントプラザ

出雲大社分院

大屋根広場

健康広場

おさかな広場

西郷火災記念碑

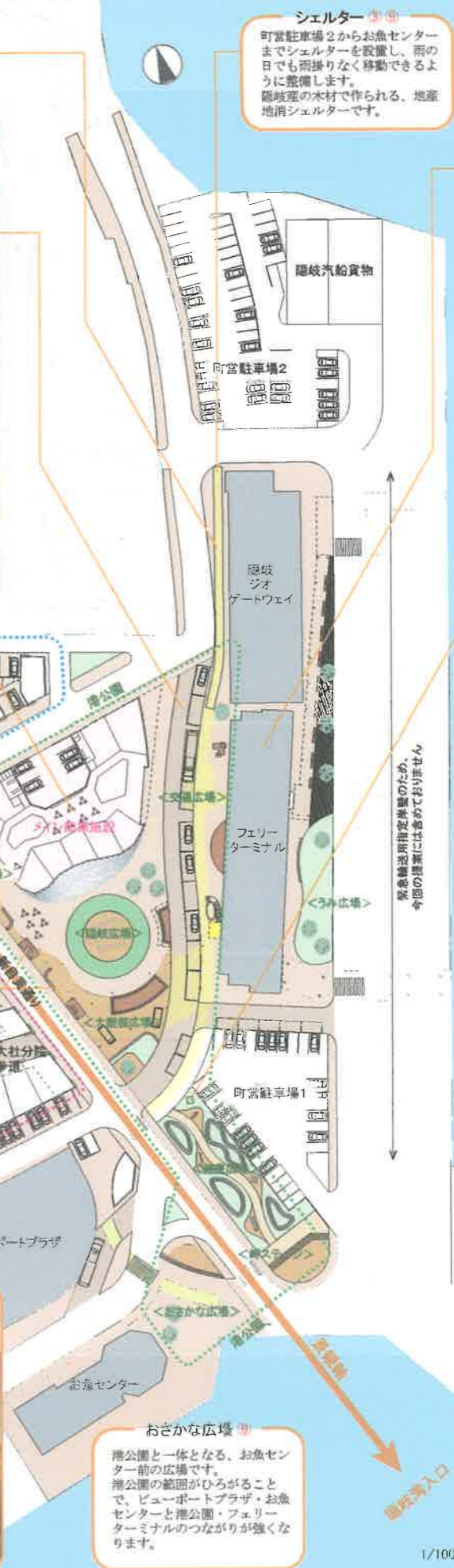
町営駐車場2

隠岐汽船貨物

シェルター

町営駐車場1

フェリーターミナル



町営駐車場2 ⑤ ⑧

隠岐汽船貨物の倉庫を移設し、現在2つに分かれている町営駐車場2を1つにまとめて利便性を向上すると共に、料金所人員コストの削減を図ります。

こどもリビング ④ ⑥ ⑧

眺めの良いフェリーターミナル3Fに、こどもメインのスペースを整備します。

うみ広場 ④ ⑦ ⑧

現況の送迎車スペースを廃止し、全体を広場として整備します。海やフェリーを見ながら寛げる場所です。既存送迎車用のシェルターを撤去し、高速艇用のシェルターを新設します。



西郷火災記念碑 ④

明治21年の大火災など様々な水災にみまわれた西郷を見守る記念碑は港公園内に移設します。



岬ステージ ④ ⑦

港公園の先端に位置する、最も海側の眺めのよい場所です。日常から少し離れた場所であそんだり、旅の終わりに隠岐を感じられるステージです。



健康広場 ④ ⑧

子供から高齢者まで楽しめる健康遊具が設置された広場です。港公園に日常的に通うきっかけになります。旅行の合間に海を見ながら身体を伸ばしたりもできます。



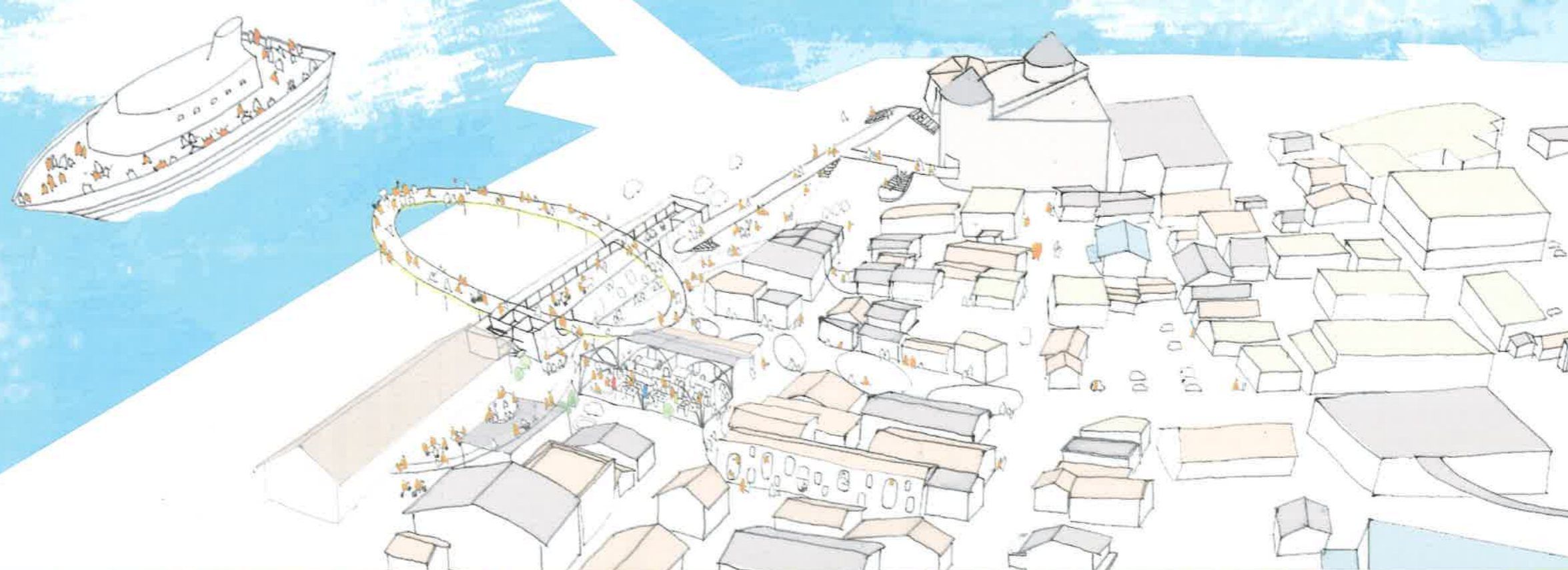
『リング・ブリッジ』

—“リング”でつなく、ひと、もの、こと、場所、記憶—

360° 魅力的な環境に囲まれた、この隠岐の島町の玄関口である西郷港を、さまざまなかたちでつなげていく、“リング”の建築・まちづくりのデザインを提案します。

西郷港周辺地区の“リング”は、「つなく（むすぶ）」、「動き（元気）を出す」、「世界へ発信（PR）」という役割をシンボリックに担いながら

島内（港側と街側）をシームレスにつなげ、隠岐に住む人々どうしや、さらに国内・世界から島を訪れる人々をつなげていく流れへと展開していきます。



1. 『リング・ブリッジ』誕生： 隠岐の島町の玄関口の顔としての“リング”

限られた条件の中で、効果的に新しい空間デザインをおこなうことが最重要と考えます。豊かな自然環境や歴史のある街並み、交通の要である空港と西郷湾に囲まれたこの場所に、360°開いた文字通りリング状の建築『リング・ブリッジ』によるターミナルのリノベーションを提案します。リング状のブリッジが様々な要素を結び付け、さらなる地域の発展に展開するシンボル（まちの顔）となります。



2. まち（エリア）全体に動きをつくるリングの展開：交流

・港の『リング・ブリッジ』が人々が滞留、交流する基点（拠点）として機能し、様々なアクティビティをうみだします。
・『リング・ブリッジ』からまち全体へリング状につながるリノベーション（整備）エリアを計画し、交流の場をまちの中に展開することによりまち全体に動きをつくり出します。



3. ひとと車もつながる空間：交通

車の回遊性
まちの玄関口を車がグルリと回る回遊性をつくり、海の景とつながるわかりやすい導線計画とします。

歩行者にオープンな通路
ターミナル前の臨港道路を歩行者へオープンな場とし、住民や観光客のための玄関口として豊かな広場のようなスペースをうみ出します。

利用しやすい交通機関乗降場所
既存の交通機能を活かし、バス乗り場、タクシー乗り場、一般車のための乗り場を一か所に集約し、スムーズな利用を促します。

人と車がつながる駐車スペース
既存の駐車スペースを継続して利用し、初期コストを抑え、住民が引き続き利用できるスペースとします。

4. 空き家をつなぐ生活の場：暮らし

・街並みに配慮し、“リング”の流れで、空き家のリノベーションをエリア全体の中で計画します。

・宿泊施設、市場へのリノベーションも盛り込み、にぎわいと共に住み続けることのできる場所づくりを提案します。

リングの輪が広がるように人々の活動が展開するイメージ

5. オープンにつなぐ自由な場所づくり：商業

・空き家をオープンスペースへコンバージョンし、カジュアルに人々のふれ合いが誘発される場所づくりを提案します。

・仮想的に商店建築ができるような魅力的な場に展開できるプラットフォームのような場の計画を提案します。

・様々なお祭り、イベント等、商業用途以外へもフレキシブルな対応が可能になり多様な住民の活動へ活用できます。

日常（広場利用） 商業施設OPEN（イベント時）

災害時には炊き出しスペースとして活用することも可能です。

6. 伝統（既存）にプラスする新しい顔：景観

・港の『リング・ブリッジ』が新しい西郷港の景観を形成します。

・階段状に伸びるブリッジは、様々な視点で、まちや海とつながり多角的に景観を楽しめる空間となります。

段々と海をみせるデザイン 階段状に楽しめる『リングブリッジ』 街並みになじみ、高さを抑えた入り口

西郷湾のフェリー等から目に留まりやすい景観夜の景観にも配慮します。

7. “リング”をフィジカルにつなぐ仕掛け：連携

・『リング・ブリッジ』から派生するように、舗装・植栽・ストリートファニチャーへのデザイン展開を提案します。

・既存建築（ジオゲートウェイ、ポートランド、フィッシャーマンズワフ）や新築する商業・交流施設を結び、街並みに人々を自然に導くような仕掛けとなります。

舗装が周辺施設との連携を高めるイメージ

8. “リング”のデザインの展開：にぎわい

・『リング』のデザインモチーフを、まちなかの各所の整備で展開が可能です。

・既存の客船ターミナル壁面を、新しいデザインモチーフの建築要素で刷新します。

フェリーターミナルファサードのイメージ 趣ある既存建築の姿を新たな形でまちに映し出します。

9. 今あるものを最大限生かす (+a)：実現性・防災

①連絡通路のオープン化 ②防災拠点として機能する『リングブリッジ』

ターミナルの連絡通路は通路や地盤レベルからの視界を妨げていた屋根と壁を改修し、透明感のある仕上げとし開放的な場にします。

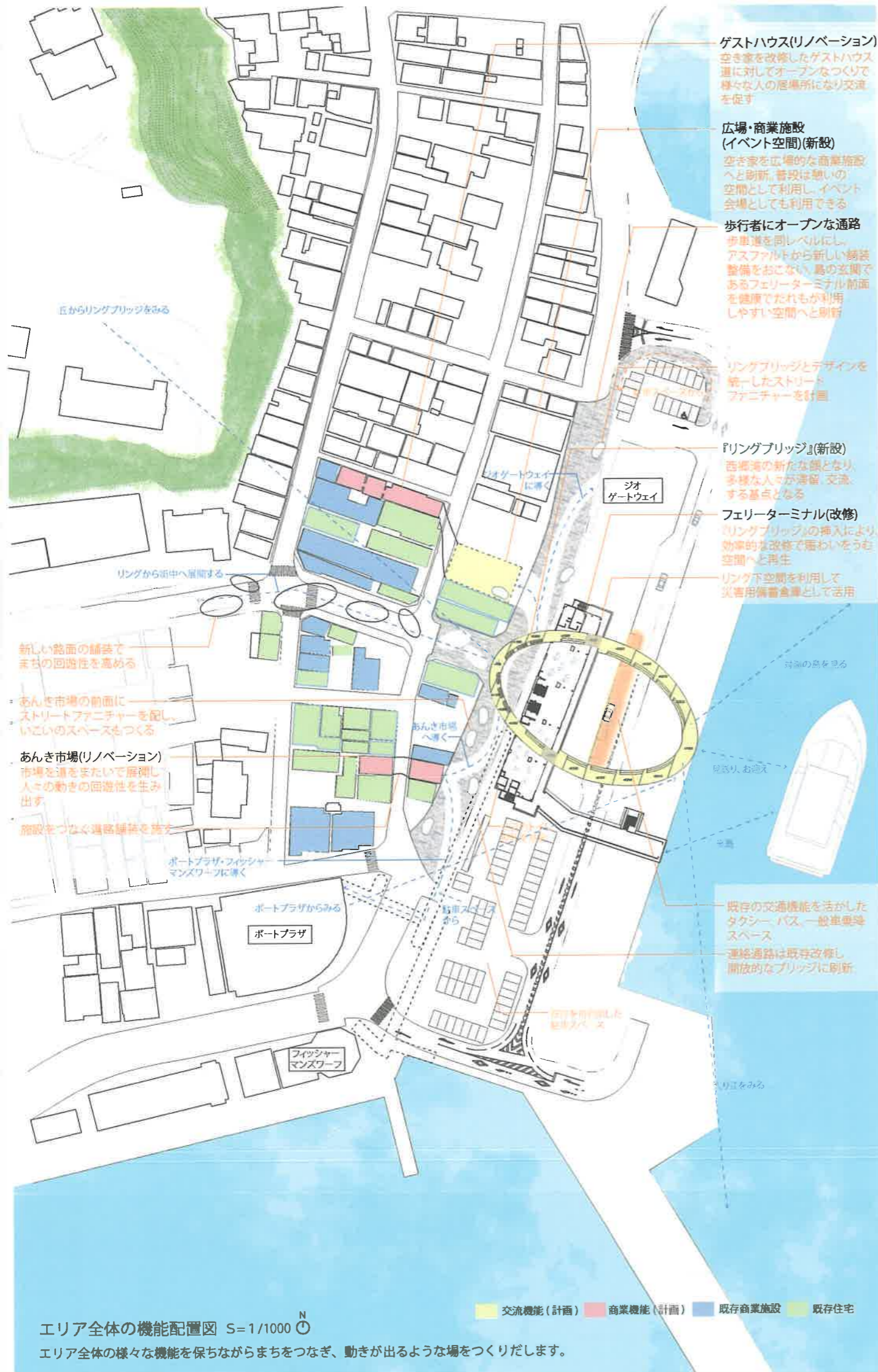
災害時は、庁舎と海上保安所の中継地点として機能できます。備蓄倉庫の設置や一時避難場所等の設定をすることで防災まちづくりの拠点へ展開できる施設としての役割も果たします。

10. 住民参加の可能なデザイン展開：利活用・運営

・リング（丸型）というシンプルなデザインモチーフを活用し、参加型によるプロジェクトの推進が可能です。

・デザインへの共有体験で、住民の思い入れのある空間づくりへと展開できます。

・設計チームもコミュニティの一員となり、アートワークショップ等の検討をおこないます。



ゲストハウス(リノベーション)
空き家を改修したゲストハウス
道に対してオープンな作りで
様々な人の居場所になり交流
を促す

広場・商業施設
(イベント空間)(新設)
空き家を広場的な商業施設
へと刷新。普段は憩いの
空間として利用し、イベント
会場としても利用できる

歩行者にオープンな通路
歩車道を同レベルにし、
アスファルトから新しい舗装
整備をおこない、島の玄関で
あるフェリーターミナル前面
を健康でたれもが利用
しやすい空間へと刷新

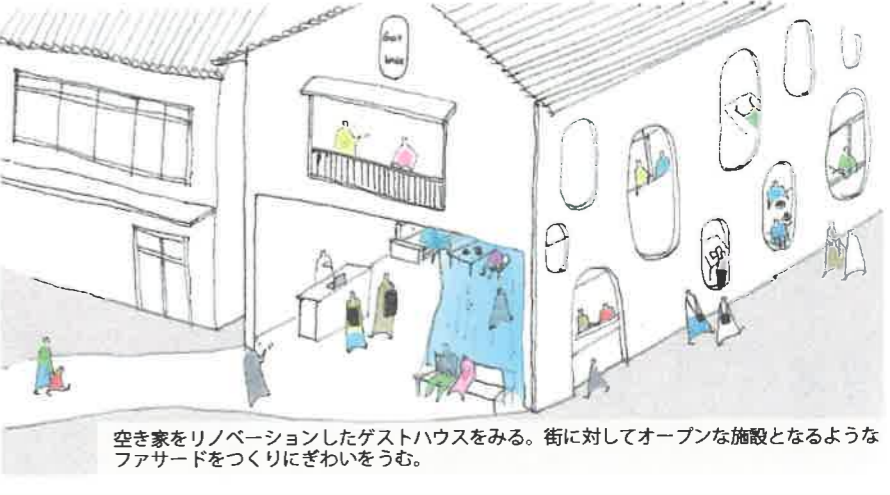
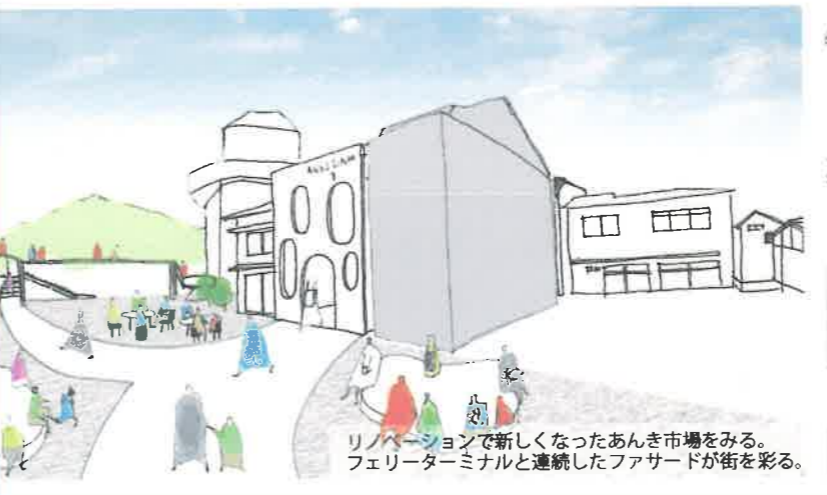
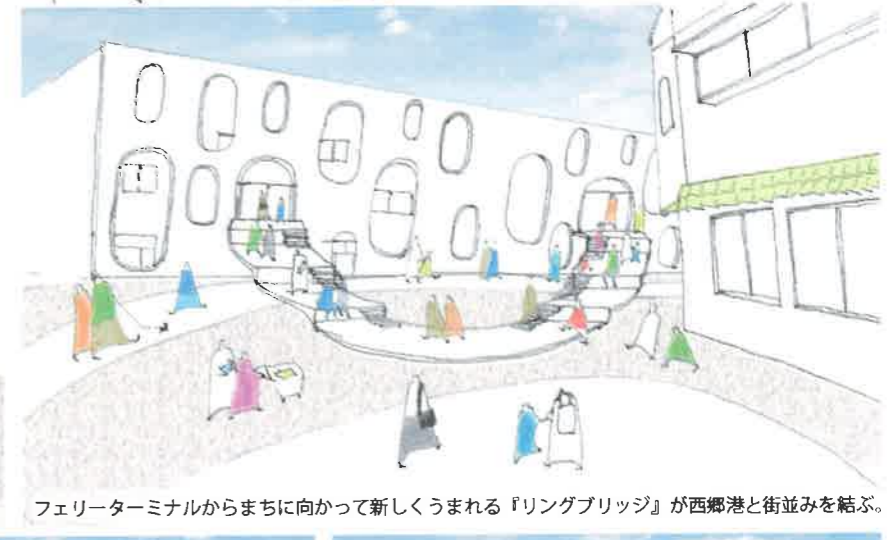
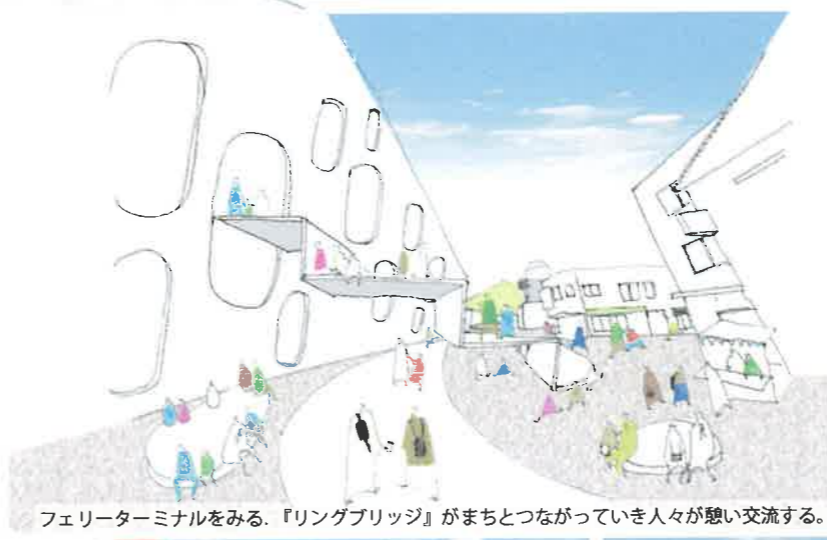
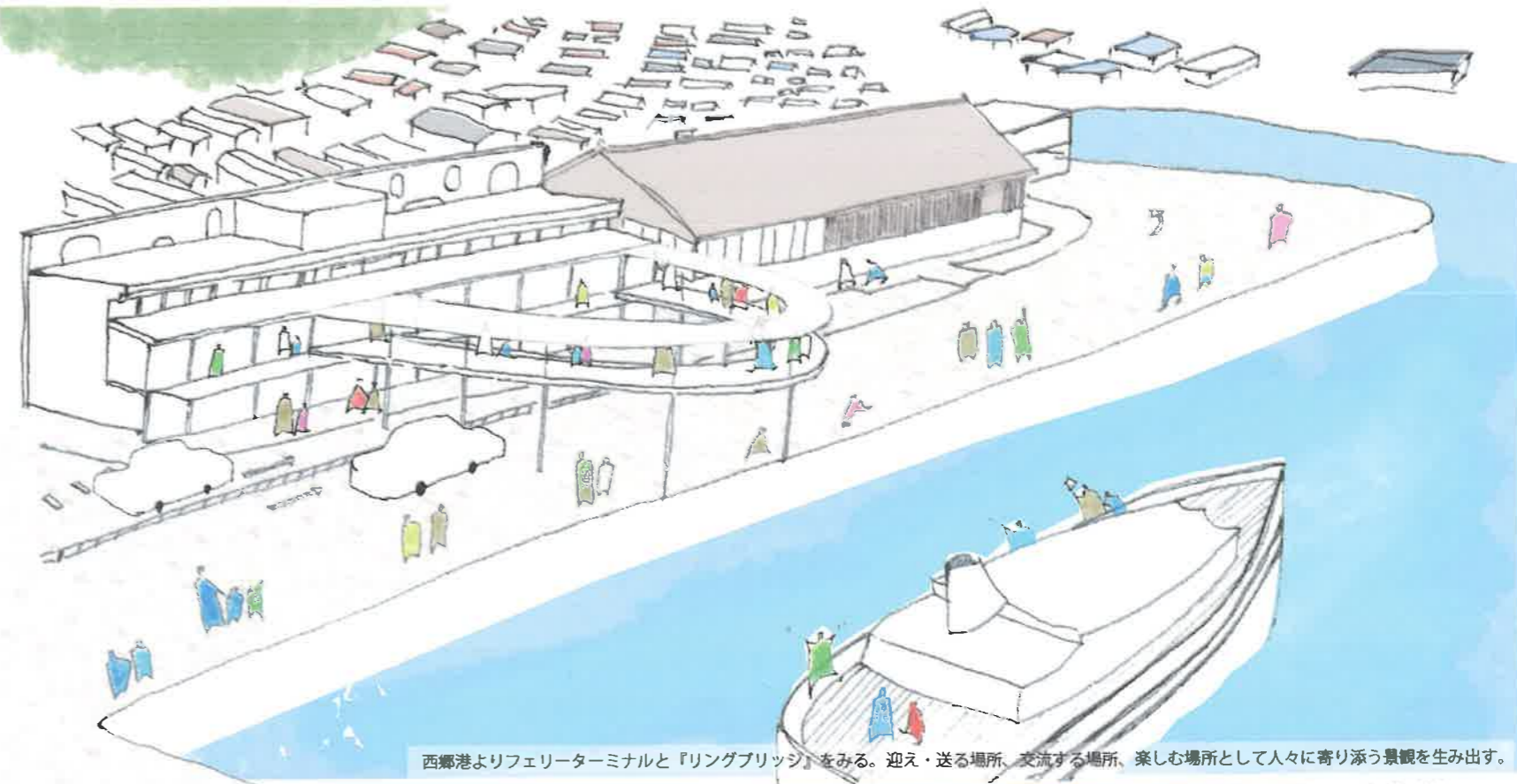
リングブリッジとデザインを
統一したストリート
ファニチャーを計画

『リングブリッジ』(新設)
西郷港の新たな顔となり、
多様な人々が滞留、交流、
する拠点となる

フェリーターミナル(改修)
『リングブリッジ』の挿入により、
効率的な改修で賑わいをうむ
空間へと再生

リング下空間を利用して
災害用備蓄倉庫として活用

既存の交通機能を活かした
タクシー、バス、一般車乗降
スペース
連絡通路は既存改修し
開放的なブリッジに刷新

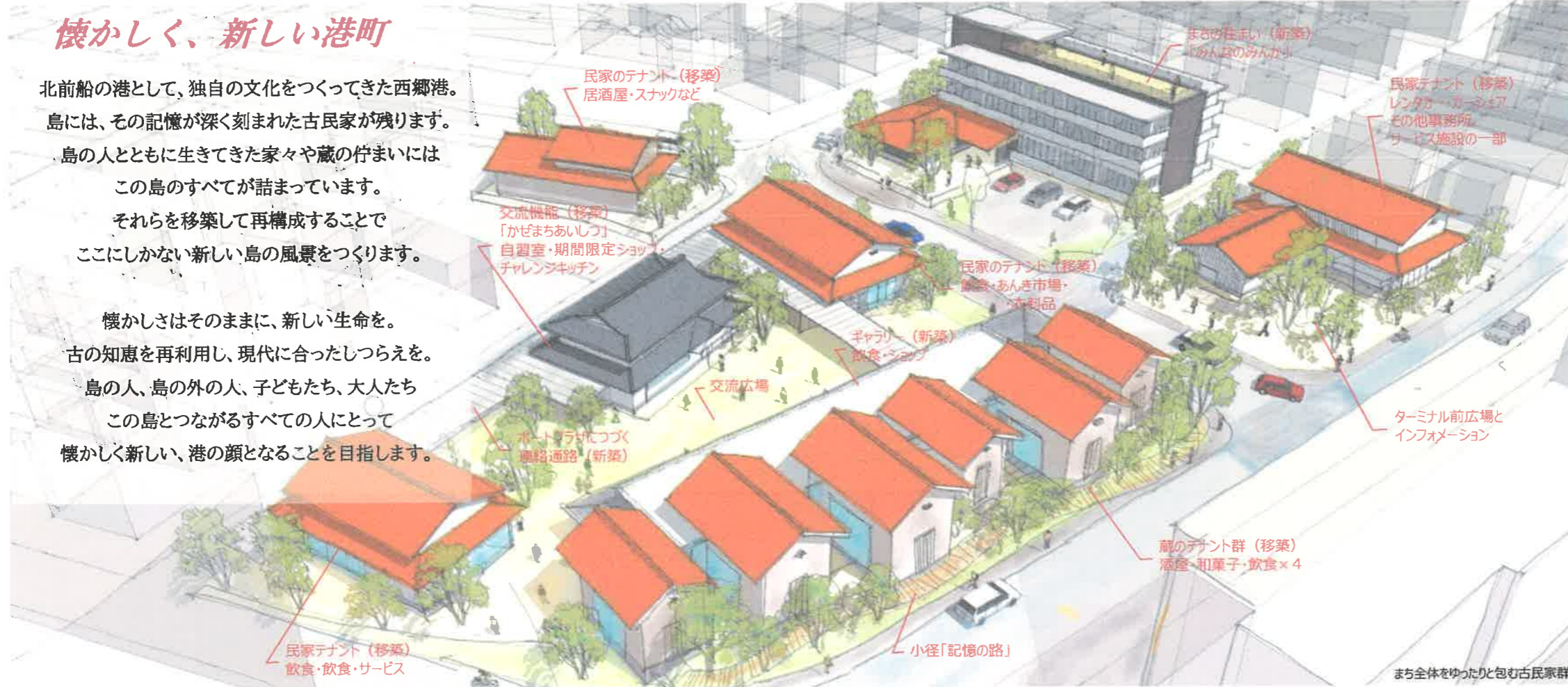


懐かしく、新しい港町

北前船の港として、独自の文化をつくってきた西郷港。島には、その記憶が深く刻まれた古民家が残ります。

島の人とともに生きてきた家々や蔵の佇まいにはこの島のすべてが詰まっています。それらを移築して再構成することでここにしかない新しい島の風景をつくります。

懐かしさはそのままに、新しい生命を。古の知恵を再利用し、現代に合ったしつらえを。島の人、島の外の人、子どもたち、大人たちこの島とつながるすべての人にとって懐かしく新しい、港の顔となることを目指します。



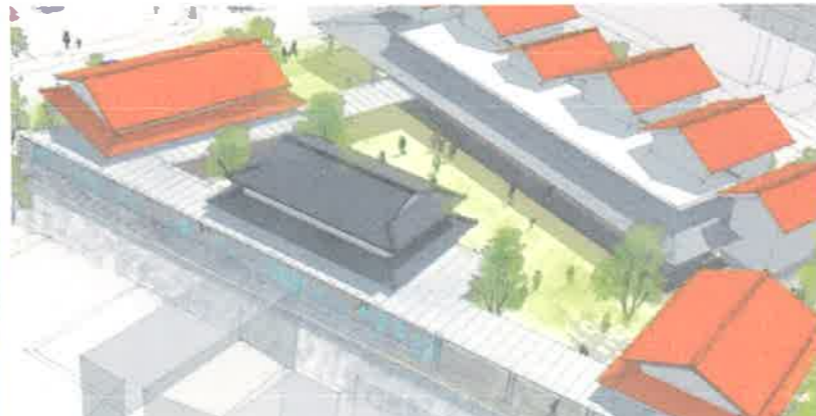
交流広場への入り口



天神通りの様子



小径「記憶の路」



大社小路とポートプラザをつなぐ連絡通路



神社への遊歩道 (交流広場)

コンセプトチャート

隠岐の島町西郷港周辺地区デザインコンペ
海と世代をつなぐまちづくり

- 西郷港周辺の活性化
- 世代を越えた交流空間の実現
- 安心・安全なまち
- ふるさとを思う心を育てる

コンセプトを具現化するための
7つのチャレンジ



- ①シンボル性と景観
- ②サーキュラーエコノミー
- ③古民家移築と新築の調和
- ④自然エネルギー利用、環境配慮
- ⑤安心安全な全体計画
- ⑥暮らす人たちの未来をつくる
- ⑦誇りを持てるまちに

具体的手法 (×避けるべき方向 ○向かうべき方向)

- ×広い敷地の中に建物を置いただけの、どこにでもありそうな施設。
○島の歴史をまとった古民家、新しいものではつくりえない価値を生かした懐かしき情緒ある風景を創生する。島らしい風景をつくる。
- ×最新の材料を使った特別な建物
○「島のものは 島のもので」をキーワードに、島にもともとあるものを利用し、価値を減らすことなく再生・再利用し続ける仕組みづくり。島ならではの循環型の経済モデルをつくる。
- ×大規模で特別な技術を使わなければならない建物。
○移築する古民家と、新築の建物の特性をふまえ、バランスがよく使いやすくエコロジーな魅力ある建物とする。
- ×寒い・暑い、機械設備に頼るしかない建築空間
○自然採光、自然通風、木材エネルギーを積極的に活用した建物とし、躯体性能の向上により、夏季は最小限の冷房、冬季暖房費ゼロを目指す。
- ×設計、まちづくり担当者、暮らす人の思い込みによる気持ちのズレ。
○BIMを活用し、誰もが完成形をイメージしやすい提案と、設計段階で前もって問題点を把握し、完成後の安全性確保や維持管理を未然に解決する。
- ×観光だけに特化したまちづくり
○実際にそこで暮らすひとたちにとって、維持保全していくことができる仕組みや運営方法をワークショップやスクーリングを通して提案する。
- ×「いくつかあるうちの一つのもの」という設計者意識。
○「ここだけにしかないだ一つのもの」というみんなの意識。地元関係者や指定管理者、店舗関係者等、みんなで考える設計プロセスと完成後にも地元の人々が手を加えていくことができる余白を創出する。

過去と未来が織りなす港空間
～古民家がつなぐ島の賑わい～

島の過去と未来。私たちは今も進化のまっただなかに生きています。既存のジオゲートウェイには展示空間があり隠岐の「過去を知る場所」があります。

今回のまちの再編で、長きにわたり島の時間をまとい島の歴史の残る島内の古民家を用いることで、**新旧世代の織りなす港空間**をつくります。

古きよきものを現代に合わせて改修したまちは、次世代を担う若者が利用し「**未来を考える場所**」として、隠岐の生活や文化を未来へつなげます。

島内には古民家が多くありますが「大切な家だから壊さず活用したい」という声の一方、「予算が無く解体できない」と空家問題も深刻化しています。この西郷港周辺地区で**保全され現代に生きる古民家の姿**を具現化し、西郷港にとどまらず「みち」を通じ、各町が残された古民家と向き合い保全活動につなげることで、**島全体の賑わいの再生**を図ります。島で働く人、訪れる人が生き生きと重なり合い、**未来への道しるべ**となるのまち姿を目指します。

西郷港は、かつて北前船の風待ち港として栄えたまちです。運ばれた多くの文化は、長い年月を経て隠岐の風土や人情に触れ、独自のものに発展しました。今は、海廻りには大きな建物が建設され、まちは煩雑な建物が高密度に立ち並び、利便性を得た一方、海とまちは分断され、閉塞的な印象を与えています。

わたしたちは、隠岐に初めて訪れる人が、**隠岐を感じ、興味を持ってもらうまち**をつくるため、**隠岐の文化や自然の歴史を生かした「懐かしき情緒ある風景」**の創生と、街区の再整備をし、海とまち、そして世代をつなぐまちづくりを行います。

Misslon1/山と大地を感じて海とつなぐ

島民と海をつなげるターミナル改修

海側の建物を低層に、中層にする必要がある建物は山側に配置し、段々畑のような街並みとしました。ターミナルの階段室の改修を行い、階段を吹き抜けにし、軽やかな印象の階段にかけかえます。まち側のファサードのガラス張りがターミナルを行きかう軌跡と、その向こうの海を感じます。

送迎から一番近くに計画した「みさきデッキ」

誰もが、お迎え、見送りしやすい場所として、ターミナル先端に「みさきデッキ」を設け、送迎者が利用しやすい位置としました。デッキ下には、バス、タクシー乗り場の交通を一元化し広場を設けました。送迎者用駐車場の近くとし、お出迎えやお見送りに使いやすい配置としました。

歩車共存・歩道を広く歩ける街に

にぎやかな歩行空間を実現するため、広い道路は歩車境界から段差と区画線をなくし、石畳の舗装パターンを工夫することで歩車を明確に分離せず、一体的な空間となるよう演出します。特に島民広場前は歩道を広くし、ゆるくクランクして広場感を滲みだします。

道と山にあかりを灯し避難の目印に

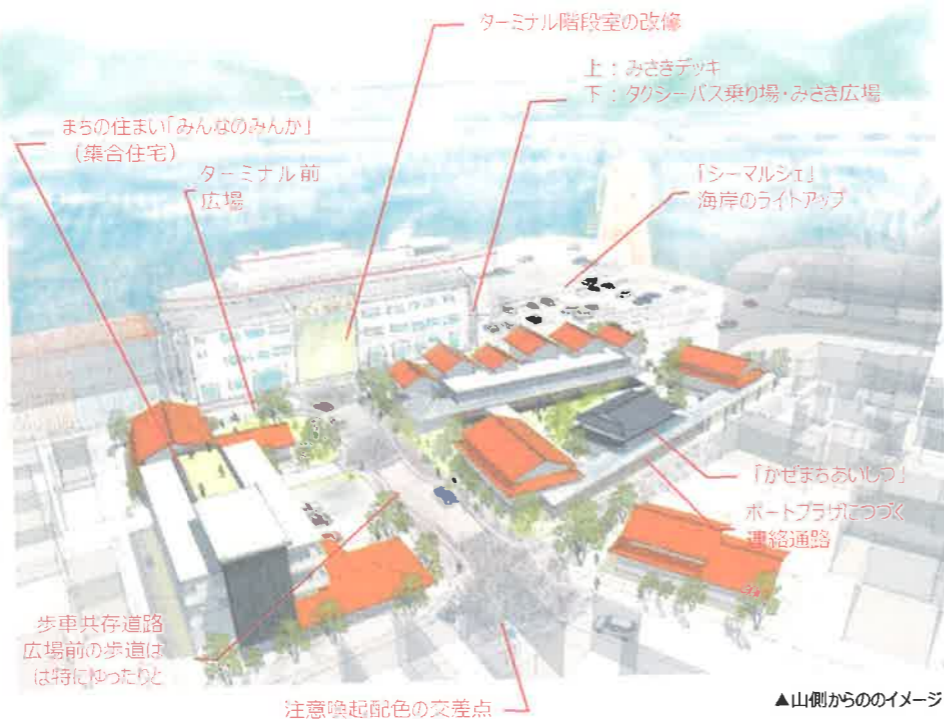
島根にゆかりのある小説家小泉八雲「稲むらの火」の一節にあるように「避難先のともしび」は有効な手段です。停電時でも点灯するソーラー電源とした防災照明を避難先の西郷公園に常設し、普段からほんのりと目印灯として点灯させます。また、人が近づけば十分に明るくなり安心感を与えます。街路照明にはかつて船のバラスト（重石）に使われ、現在も町内にも利用した痕跡が多くみられる来待石を採用し、情緒ある景観と、避難の道（例：天神通り）を案内します。

街路の明りを確保
屋根灯罩は
隠岐の特徴

「みち」ごとの形状と
避難経路を反映
(例：天神通り)

足元を照らし
安全を確保

▲LED 灯籠イメージ



▲山側からのイメージ



▲ターミナルからの夜景イメージ

まちの住まい「みんなのみんな」(集合住宅)

計画地内に居住する人の住まいを建設します。集合住宅ですが、海が見え、互や緑化で周りの古民家区となじむ外観とします。老若男女みんなで楽しめる民家として、共有ゾーンには宿泊可能な交流広間とキッチンを備え、各室は生活スタイルや家族の成長に応じた提案をします。



▲DINKS 向け ▲ファミリー向け

西郷港のシーマルシェは「キッチンカーの聖地」

ターミナル海側の屋外平場はキッチンカーの設置スペースとして、本土からの出店者に渡航費補助を行い、積極的な参加を誘致し、食を通して遠くの街とつながります。また、アウトドア用品のシェアと収蔵庫を整備し、テラス席のセルフコーディネートを推進し、港の賑わいを創出します。



▲シーマルシェのイメージ

交通結節点はジオスケープ

乗り換えやレンタカーは広場とセットでジオパークらしい植栽や自然樹形の樹木を選定します。インフォメーションとセットで作庭し、隠岐の島町を感じられる庭園を提案します。将来的にジオ庭園の拠点を西郷公園に広げます。



▲クロマツ



▲トウテイラン

▲隠岐の植物をあしらったターミナル前広場のイメージ

▲ナゴラン

Misslon2/時間を超えて、世代をつなぐ

隠岐の古民家の特徴を生かした使い方を提案

島の民家は古くは板葺きや杉皮葺きの石置き屋根が多くありました。現代、そのままの形で残るのは一部の民家と舟小屋ですが、互に乗せ換えた屋根の形状や緩い勾配からその名残が残っています。入口を入ってすぐにある土間（ウスニワ）内の、囲炉裏や炬燵を配した居間（ナカエ）と 2 階に上がる階段が特徴です。格子に組んだ小屋組みと軒を深く持ち出す出し桁、強い広葉樹を用いる隅木を使った造りも隠岐独特のものです。民家文化は隠岐の文化の輪郭をはっきりと見せてくれます。力強く、優しく包み込むような隠岐の民家を、島外から来る人にも見せたいと思います。特徴と景観を活かしながら、隠岐を訪れる人や暮らす人に役立つ、古民家の利用方法を提案します。



▲実際の隠岐の島町民家の野帳（調査時のノート） ▲島には蔵も多い



▲隠岐独特の軒（都万目の家）は塩を含んだ海風も受け止めます。



▲古材以外にも島内材を美しく利用 ▲旧布施村役場改修イメージ

実績ある古民家調査チーム

我々は隠岐の島町で古民家の調査をした実績があり、数十軒の情緒ある民家が島内にあることを把握しています。その多くは空き家で中には既に解体されたもの、朽ちるのを待つものがあります。この島に眠っている財産を活用し、世代をつなぐ賑わいを取り戻します。現代の技術を踏まえて最適な改修方法を提案します。

ゾーニング図（10年後）



ゾーニング図（20年後）



未来に向けて

10年後フェリーターミナルは 50 歳になります。港湾施設の寿命は 50 年と言われていることから、この計画は 10 年以上先を見据えた計画が必要です。10 年といえば、ワークショップに参加した小学生中学生の子供たちは、おそらく社会に出て、進学したり、就職したり、新しい家族が出来ている子もいるかもしれません。たとえその時、隠岐の島町に住んでいなくても、彼らの思い出風景が、海や山とともにあり、隠岐の島町らしく誇れるものであってほしいと思います。私たちは地元的设计グループであり、なにより隠岐諸島が大好きです。この先、20 年 30 年後の未来も、一緒に描いていきたい、そう考えています。

Misslon3/今を未来につなぐ

交流機能「かせまちあいしつ」

・旧布施村役場は過去に実測調査を行いました。この建物は民家、役場、集会所と用途を変えながら島の記憶を残してきました。これを移築し交流広場を中心とした交流機能「かせまちあいしつ」を計画します。建物には自習コーナーやチャレンジキッチン、期間限定ショップなど、誰もが使いやすく、地域の人が世代を越えてそれぞれが主役になれる、生き生きとした交流の場をつくります。広場には可動式の屋台やテラス席を用い島外の人も参加しやすい場をつくります。

蔵ショップ&ギャラリー

・島内に残されている蔵を移築し、風待ち通り側に蔵ショップをつくります。蔵が並ぶ外観は、船小屋群を想起させます。蔵 1 棟あたりの面積は個人出店にちよふと良い広さです。交流広場側には蔵ショップをつなぐようにギャラリーを新築し、広場と一体的に使うことで島民交流の場となります。

3つの高校4つの学科の「Oneプロジェクト」

・これから社会に出ていく高校生を対象に、お互いの知識を合わせながらひとつ（One）を企画から販売まで行うプロジェクトを進めます。実際に販売を行える場や期間限定ショップを計画します。

古民家改修 DIY スクール&ワークショップ

・残された家屋等の維持管理は、頭を悩ますことが多いです。相続だけでは修繕技術までは継承できず、放置し解体される建物も多くあります。古民家改修の工程をオープンにすることで、島民ひとりひとりが財産を保護できるような技術を、ワークショップやスクールにより育んでいきます。

島のもものは島のもので 木材コーディネート

・島の材料確保と森林保全に貢献するため、設計・デザイン段階から適切な木材の選定や加工方法、森林調査を行います。木材コーディネートの経験があり、主要木材を計画的にまかない、ウッドショックの影響を最小限に留めるなどの実績があります。

炭素排出ゼロに向けた温熱調査

・断熱改修を施した古民家を暖房する際に、大きな設備は不要です。炭素排出ゼロの島内の薪を燃料に利用した薪ストーブであれば驚くほど小さなサイズで賄え、燃焼後は建物の効果で快適な温度を維持します。建設後も、温熱環境調査を実施し、炭素削減の効果の可視化、調査知見を得て世界に発信できます。

多彩な設計チーム

・チーム内に一級建築士の在籍する障がい者就労支援事業所を擁し、当事者による建物やまちのバリアフリー調査を実施します。・わたしたちは子育て中の女性建築士や、UIターン設計者が在籍する、島根が拠点のチームです。過疎地域の問題を共有し、様々な経験を設計に活かします。より便利で受け入れられやすいまちをフットワーク軽くチャレンジ精神をもって取り組みます。

地域と協働の進め方

・新しい入居者や参加者をあらかじめ早くから募り、店舗運営者、地域団体等様々な組織と、密に情報交換をしながら、「協働」を積極的に取り入れます。建物の設計者がフェーズに合わせて個別にヒアリングを行い、一人一人のニーズをすくいあげます。

分かりやすい設計プロセス

・設計にあたっては、行政、指定管理者、漁業関係者、地域団体など、様々な立場の異なる関係者の合意形成が重要となります。緊密に情報交換をしながら、ワークショップを積極的に取り入れたオープンな設計プロセスとします。

・BIM(ビルディングインフォメーションモデリング)による設計を積極的に取り入れ、誰が見ても分かりやすい設計プロセスとします。BIM の活用により、設計段階においてあらかじめ予見しうる問題点を未然に把握することができます。



▲旧布施村役場



▲都万の舟屋群



▲ワークショップイメージ



▲室内環境調査のイメージ



▲バリアフリー調査のイメージ

基本構想	設計期間	施行期間	運営開始
■関係者	■個別	■細やかな	
■ヒアリング	■ヒアリング	■要望のすくい上げ	
■町民	■企画系 WS	■制作系 WS	■調査系 WS
■市民	■調査・発表	■意見反映	■イベント・スクール等

▲協働のスケジュール



▲BIM のイメージ

「海とまちをつなぎ、世代をつなぐまちづくり～にぎわいと安心・安全の実現」

1:500

広場が生ま出す 隠岐の新しい風景

フェリーターミナル前面の臨港道路を付け替え、交流機能としての広場に変えることで、「海とまち」「人と人」をつなぐ新しい場所が隠岐の島に生まれます。広場によって生ま出されるつながりは、

4つの「新しい風景」を西郷港周辺地区にもたらしめます。

- ・こどもと育むー 隠岐の未来
- ・みなで楽しむー 隠岐の生活
- ・旅人と交わるー 隠岐の文化
- ・世界に伝えるー 隠岐の誇り

誰もがこの風景の一員になれる場所。西郷港周辺地区は変わります。

<交通機能の整備>

フェリーターミナルへのアクセス機能を海側に集約します。

- ・公共交通バス、観光バス用3台、タクシー用2台、一般車用5台の乗降スペースを設け、別にタクシープール9台を設けることにより、車の流れを円滑にします。
- ・駐車スペースは、南側に一般車用として65台、北側に物置倉庫を移設し、長期利用者用として22台、ジオゲートウェイ用に26台を確保します。
- ・レンタカーは、現在あんき市場があるところに、レンタカープール12台を確保します。

<暮らし機能・商業機能の整備>

道路に沿った商業店舗は、広場と共に島の新しい風景となり、にぎわいをつくります。

- ・広場を生み出すことで移転の必要がある住居・商業機能を3階建ての建物に変更して移設することで、生活と生業の継続を実現します。
- ・1階部分を全て商業とすることで、道路に沿って統一感のあるにぎわいを創り出します。
- ・課題であった駐車場については建物を多層化することにより、住居に隣接した駐車スペースを生み出すことができます。
- ・各建物の屋上部分は一時避難場所として活用できるように防災備蓄機能を配置します。
- ・住居の一部には定住体験住宅にも利用できる余白を残します。移住を希望される方の一時的な居住や中長期のワーケーションに活用します。

<交流機能・商業機能の整備>

島の日常の風景にあった船小屋をモチーフとした、「海見える図書室」を交流機能を担う拠点として広場に設置します。

- ・こどもから高齢者、町民から来訪者も利用するエリアとなり、西郷港周辺地区に新しい風景を生み出す原動力になります。
- ・海見える図書室には隣接・内包する形でカフェ、物販、あんき市場、キッズスペースを配置します。

<交流機能の整備>

広場と出雲大社別院をつなぎます。

- ・出雲大社別院に向かう、奥行きのある景観にします。
- ・広場からは出雲大社別院と共に、北前船の航路の目印となった燈籠を望むことができます。



広場が生み出す4つの新しい風景

新しく設置する広場は交流機能を担う「海見える図書室」を配置し、以下4つの新しい風景を近隣エリア全体に生み出す起点となります。

① こどもと育む一隅の未来

広場に設置する「海見える図書室」には島内最大規模のキッズスペースを配置。島の未来を担う子ども達が本や遊具を使って遊び・学べるスペースを設けます。また、読み聞かせの実施や広場と連動した大型遊具を使用したイベントなどを定期開催します。図書室内では持ち込み学習ができる座席も豊富に用意し、未来に向かって学びを楽しむ子ども達を後押しします。子ども達の活動を通じて、隠岐の輝ける未来が感じられる場所になります。

② みなで楽しむ一隅の生活

「海見える図書室」にはカフェと図書が融合したカフェ＆ライブラリーを配置。1杯のコーヒーを飲みながら読書やコミュニケーションを楽しめる町民のサードプレイスとなります。図書は館内閲覧専用とし、隠岐の島の文化や生活をテーマにした選書を中心に行います。町民も来訪者も本を通じて隠岐の島をより深く知る図書室になります。ゆったりとした時間を過ごせるカフェ＆ライブラリーで、隠岐の上質な生活を感ぜられる場所にします。

③ 旅人と交わる一隅の文化

広場に設置する「海見える図書室」にはWi-Fi環境や電源席を整備し、ワーケーションが十分に行える環境を整えます。町民が先生になって行く島の文化講座や島の食文化を伝える料理教室などを実施し、町民と来訪者の文化交流の場にもなります。

④ 世界に伝える一隅の誇り

広場には「あんき市場」を移転させることで、町民も国内外の来訪者も隠岐の島が誇る新鮮な食材に出会えるようにすることを提案します。また、広場を活用したマルシェ（朝市）を開催し、朝採れの魚介など楽しめるようにします。「海見える図書室」の一部には隠岐の島独自の「良いもの」を取り扱う特設コーナーを設け、国内外の来訪者に島独自のクラフトや地酒の販売を行います。カフェにはBARタイムを設け、地酒と簡単なおつまみが楽しめるようにもします。



広場では大型遊具を使用し、イベントを定期開催します。



絵本の山
幼少期の思い出になる象徴的な読み聞かせゾーンを配置します。



こども図書ゾーン
絵本から読み物まで幅広く設置します。



広場でのマルシェ開催
「あんき市場」と連携したマルシェの開催を計画します。



あんき市場
「あんき市場」の移転を提案します。隠岐の島の誇るべき新鮮な魚介類を購入できる場所になります。



キッズスペース
知育玩具などで遊べるキッズスペースを配置します。



豊富な学習席
持ち込み学習を可能とする豊富な学習席を配置します。電源、Wi-Fi環境も整備します。



図書ゾーン
図書ゾーンには、3,000冊規模の本を配置。コーヒーを飲みながら、読書が楽しめます。



物販スペース
隠岐の島の「良いモノ」を本と一緒に展開し、隠岐の島の誇るべきモノを伝えます。



カフェ
町民と来訪者のサードプレイスとなるカフェを設置します。BARタイムを設け、地酒も提供します。

「海見える図書室」デザインイメージ

海と生きる隠岐の人々の生活と共にあった船小屋をデザインモチーフにします。「海見える図書室」は1層とし大城山方面の視界を確保します。弧を描き、連続する切妻の屋根の型は広場と街並みにリズムを生み出します。広場には島の観光ポイントがひと目でわかる、島の形を模したテーブル状案内マップを設置し、ジオゲート内の観光案内所との連携を図ります。



にぎわいを演出する手法

- ① 広場を活用したイベント開催**
キッズスペースと広場を連動させた大型遊具でのイベント実施や、「あんき市場」と連携したマルシェの開催などを通じて、町民も来訪者も西郷港周辺地区に滞在する多様な理由を生み出します。
- ② 「海見える図書室」でのイベント開催**
「海見える図書室」の中でも講演会やものづくりワークショップなどを開催します。子どもから高齢者まで幅広い層を対象にした多彩なイベントを開催することで、誰でも楽しめる西郷港周辺地区となります。
- ③ 広場周辺の商業整備の実行**
広場をつくることで新しく建てる住居・商業棟は1階部分を全て商業のフロアとします。道沿いの広場に面して新たな商店街の景色となり、視覚的なにぎわいが生まれます。



運営に関する手法

- ① 365日開館**
広場及び「海見える図書室」は原則365日年中無休の開館を行うことを提案します。お正月やお盆など、島外に出た若者達が帰省する際に安心して集まれる公共の場となります。
- ② 地元スタッフによる運営**
広場及び「海見える図書室」は指定管理者制度などを活用し、公設民営を提案します。デザイン性やサービスの内容など、若者が働きたく魅力的な施設にすることを意識します。地元雇用を推進し、運営ノウハウが未永く地元に残り続けるよう共同提案企業がサポートを行います。
- ③ 商業機能のマネジメント**
商業機能には既存の事業者の出店に加えて、新規出店の余白を設けます。町民ニーズ、来訪者ニーズを把握した上でリーシングを行う中間支援機能を担う組織（まちづくり会社等）の立ち上げを検討し、商業区画の統一性を図りながらバランスのとれたテナント構成を実現します。
- ④ 防災対策**
利用者及びスタッフの安全を確保するため、「海見える図書室」のスタッフは災害時対応を訓練等により身につけ、災害を最小限に防ぐよう努めます。また新しく建てる住居及び商業等の屋上部分は一時避難所として利用できるようにします。

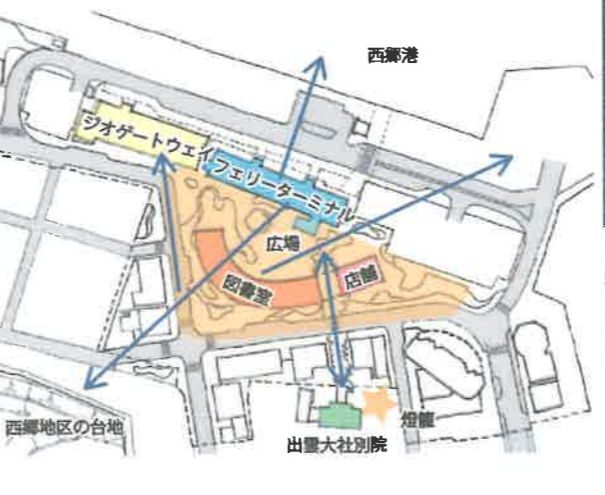
各機能の連携を深めるための手法



<エリア全体の機能配置図>
広場を介して、各施設への動線が明確（シンプル）になり、各施設の連携を深め、広場を中心に新しいにぎわいが生まれます。フェリーターミナル2階から直接広場につながる階段を設け、各施設への旅客動線を整備します。ジオゲートウェイ側に広げることで、広場との連携を図ります。



<交通機能に関する整備方針>
分散している各交通機能（公共交通バス・観光バス・タクシー・一般車）をフェリーターミナルの海側に集約し、車の流れをスムーズにします。道沿いには歩道幅2.5m以上の歩行空間をつくり、各所に車寄せを設けることで、安心して西郷港周辺に集える環境を整備します。広場から直接つながる階段を介して、フェリーターミナルの2階に新たなカフェ機能を持つ「海のテラス」を設けます。待合スペースと旅客動線はサインを使って明確にし、フェリーからブリッジを渡ってきたところには、島全体の大きな観光インフォメーションを展示します。



<景観形成に関する整備方針>
ターミナルビルに続く2階レベルのブリッジを撤去し、視界を広げることで、広場を介して、まちと海をつなぎます。広場を新たに作ることで、アプローチ側（国道485号線）から、フェリーターミナル・ジオゲートウェイの全景が見え、島の新しい景色となります。また、広場、西郷地域の台地への視認性を高め、町民はもとより来訪者にも、災害時の避難場所を分かりやすくします。



<照明計画>
駐車場は明るさを確保しますが、建物まわりは、室内からのこもれ灯を重視し、歩行に支障のない明るさにします。ジオゲートウェイの明るさに合わせた、ターミナル壁面へのライトアップや、ガラス張りの階段室の照明演出を行います。



<西郷港周辺地区デザイン図>
新しくつくる広場は、台地を囲うように、川沿いに沿って走る「西町通り」と「目貫通り」の接点に位置します。海を望む広場に島の人々の日常を喚起し、利便性に富む新しい施設を設けることで、人々の流れが文化施設・運動施設の利用を含め西郷港周辺地区に広がり、地域を活性化します。海を介して川へとつながる広場での日常は、西郷地域の歴史的な川沿いの街並みを再認識するきっかけに満ち溢れています。

隠岐うみまち再生計画：地の人(町民)すべてが生き生きと活躍の場をつくり、みんなで白い帆になって海に出よう、風の人(来訪者)を迎えよう

海とまちをつなぎ、地の人(町民)が風の人(来訪者)を迎える、「白帆の林立」を全体景観とし、地の人・風の人(来訪者)が滞在して交流する「かぜまち広場」、そして町全体が住まいや泊まりの場となる「まちなか居住」を提案します。



風まち広場で踊りを踊ろう、演説をしよう、フルードを吹こう、そして最後にみんなが白い帆になって海に出よう、風の人を迎えよう。隠岐の島の海は北前船と漁船のなりわいで白帆がなびいていました。それらを想起し、地の人たちの歓迎の意志を示す群像形として「白帆の林立」景観を提案します。

エリア全体の考え方 歩行空間が海とまち・人々の暮らしを有機的につなぐ滞在の場への再編

- 現行の道路構成を見直すことで豊かな歩行空間「グランストリート」、まちなかストリート」を創出し歩行空間の中心となり、「フェリーターミナル改修」によって「うみ」と「まち」をつなぐ。
- 誰でも一日一度は港へ行きたい魅力の場「かぜまち広場」を、海とまちの節点、日常と非日常の節点、地の人と風の人との出会い、交流の節点として提案します。



「まちなかストリート」 街区の沿道小規模更新によるまちなみ形成

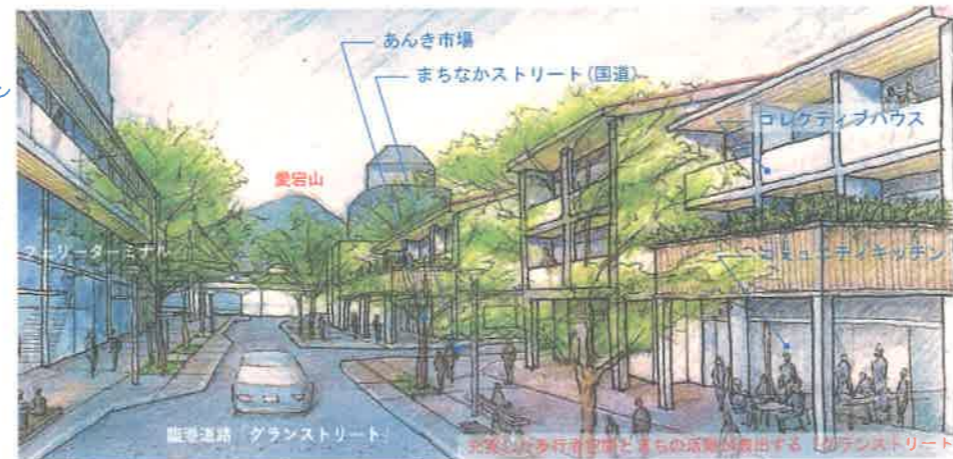
- 道路の再編により、国道部分(ターミナル前～目貫通り交差点)は歩行者優先の道路とします。
- 地元車両・緊急車両以外は原則通行不可とし、安全でにぎわいのある、歩行者空間を確保します。
- 沿道街区は、既存の建物・街区を活かし、「空き家改修」「リノベーション」「小規模共同建て替え」「空地の有効活用」など、小さくても魅力的な更新を積み重ねるようにし、10年かけてまちの景観を整えます。
- このような整備の考え方は将来的に「西郷港玄関口まちづくり計画」にあるまち全体に広がっていきます。



まちなかに採用する素材案	
<p>木板張り：ジオゲートウェイでも採用されている木板張りは、地域の森林組合と連携し持続的にかつ柔軟にできる</p>	
<p>帆布：かぜまち広場のモチーフを引き継ぐ、風にゆらぐ様子を感じさせる</p>	
<p>石州瓦：凍害や塩害に強い石州瓦は隠岐地域で広く使用され、気候風土に適しており、北前船で広がったとされる</p>	
<p>コールテン鋼：耐食性鋼板、湿度の高い海辺でも利用される、古代からの島根の特産品の鉄を表現できる</p>	

交流 快適な歩行空間の骨格「グランストリート」

- 臨港道路のフェリーターミナル北側を一方通行化することでゆったりと歩ける専用空間「グランストリート」をつくります。
- このグランストリート周辺には魅力ある施設を整備し、また、「かぜまち広場」から「まちなか」につながる「大社緑道公園」や、新たに演出される屋外空間で各々の施設を結びつける役割をもつ。



①景観-隠岐の島町の玄関口にふさわしく、海とまちを感じることができる景観づくり方針

景観 コモンズ協定・デザインコード

まちなかをデザインコードにより心地良いスケール感と開放性のある街並みに再生する。小規模更新における空間づくりのルールにより緩やかに街並み形成を誘導します。土地や建物をまち全体の資本と捉え街並みを共有の財産とします(以下、コモンズ協定の例、左図参照)

- **強くて住みやすいまちにする(隣棟間隔、採光・通風・防災) デザインコード**
 - ①敷地境界線から有効400mm確保、②接道をしていない住居は改善し、空地を創出する。
 - ③誘導居住水準(都市型) 居住面積40㎡/単身、20㎡×世帯人数+15㎡以上等をまもる。
- **町を楽しくさせるデザインコード**
 - ①1階に庇や軒をつくる(中間領域、雨宿り、環境改善・町の表情)、②共有空間は植栽とベンチを施し、近隣で管理する、③地域の素材の一部は必ず使う(左図参照)、④街路樹のある街路の清掃、ストリートファニチャーの維持は、行政の費用で地域住民が維持する。
- ターミナル改修では、「まちなか」に向かって壁のように立ち上がる外壁を、外付け方式の耐震補強柱梁にて補強。水平線を強調し、中心部をガラスとした、開放的な外観に変更し、まちなかやジオゲートウェイに呼応するスケール感と開放性を表現し、一体感を演出する(左図参照)。

商業 交流 既存の建物、まちなみを活かす、小規模な更新の連続によるまちの再生、まちなかの空き家、空き地の活用アイデア集

- グランストリートの西側広場に面する街区は、2階と3階の木造建築を町屋風に新築し、チャレンジショップやコモンキッチン(子供食堂)・カフェなど、シェア機能を持つ多彩な商業施設を提案。
- まちなかストリートを挟んだ向かいの街区には、日常の食材購入も行う「あんき市場」を配置する。
- 3軒空家を利用した滞在拠点も整備する。これらの新しい施設と、既存の飲食店が連携し、地の人(居住者)と風の人(来訪者)が「まちなか」エリアで活動する活気ある場所をつくる。(下左図)
- 住宅の密集した部分は居住環境の改善とともに小路を整備し賑わいを生む。(下右図)



①既存小路の再建「風の人(来訪者)の滞在拠点」

②運営・仕組み-整備される施設が有益に活用されるような運営や仕組みづくり

暮らし 空家を活用する仕組みづくり

中国地方や離島のまちづくりの事例を紹介しながら、エリアマネジメントの仕組みを提案していきます。(サブリース方式等と街区更新の運営-参考事例：兵庫県篠山市)

空家家等の遊休物件をオーナーから無償で借り上げ、資金を投下して改修、これを事業者が賃貸。10年間の家賃収入で資金回収するサブリース方式を採用。新築物件等においても「隠岐うみまち再生」に寄与する計画に賛同し、賃貸契約の質料。

子育て世代 入居者 事業者 起業家

改修費用補助 家賃補助 初期投資の助成

融資制度の新設 隠岐うみまち再生に寄与する事業 優良賃貸住宅の認定

NPO法人 隠岐の島 一般社団法人 隠岐の島

インベクション+改修 改修+サブリース 借上げ+サブリース

特典・配当 役務提供 寄付・出資

隠岐の島町ファンド

応援者 町民

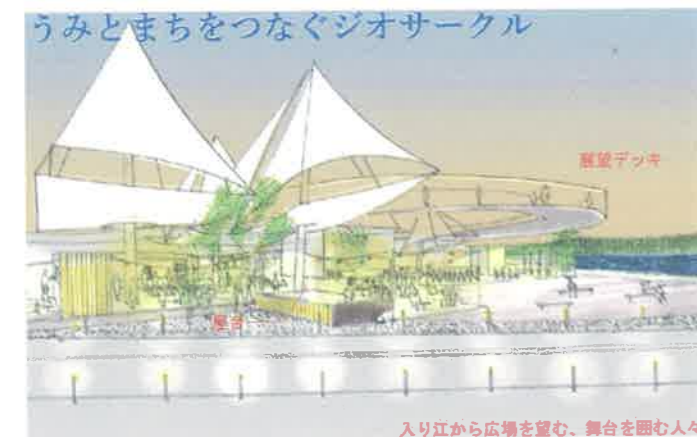
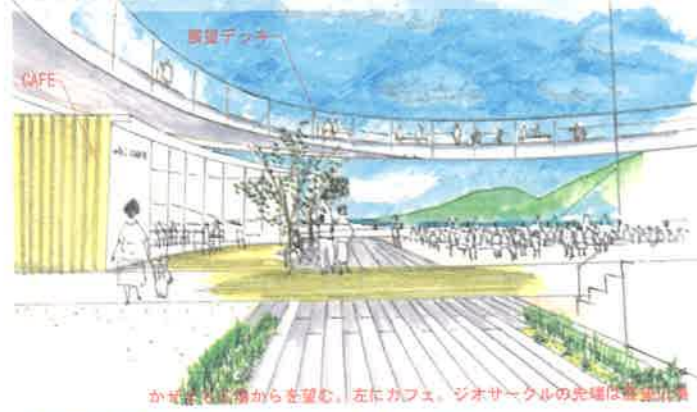
持ち家 シニア世代 所有者 土地 新築店舗 新築物件

ストック住宅の良質化

商工会 金融機関 行政

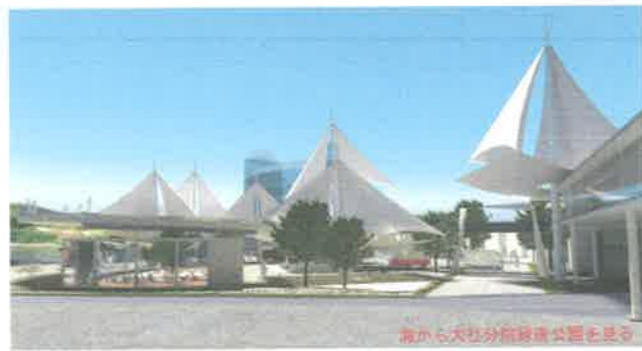
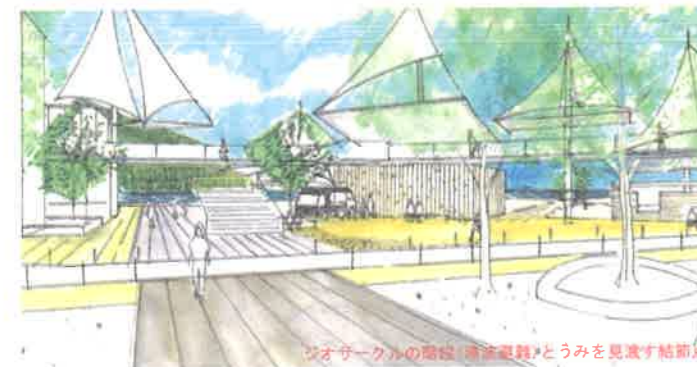
交流 「かぜまち広場」のハレの舞台・町民の居場所

- 海を見渡す「かぜまち広場」に立ち並ぶ白帆の群は、かつて多くの北前船が風待ちのために来航した記憶と隠岐の主産業の漁船の白帆を表象し、フェリーや高速船での風の人(来訪者)を迎える。
- 日常は夕涼み、軽い運動や読書など居住者・滞在者の憩いの場となり、集会やイベントに対応する非日常空間ハレの舞台にも変化する。
- 「かぜまち広場」は湾入口に向かう35m×45mの精円広場で、空中歩廊と舞台をもち、約1000人の集会が可能な、町の中心広場です。
- 舞台を中心として6つの白帆がかけられ、雨をしのぎ、ハレの広場として風の人も地の人も華やかに集まってくる雰囲気を持っています。
- 空中歩廊はフェリーターミナルとポートプラザを繋ぐ連絡橋と一体化し2か所の、緩やかな階段とエレベーターで上がると、先端は広い展望デッキとなっています。
- 隠岐の島町で毎月行われている祭りやスポーツ、音楽イベントなどのハレの舞台ですが、日常的には個人でも海を見たいとき、友人と会いたいとき、子どもを遊びに連れてくるとき、必ずここに来て、一日が始まります。個人でトランペットを吹くこともできます。
- 広場にはカフェ、子どもの広場、屋上からの食事処約500席などの施設が設けられ、広場にはストリートバスケット、フットサルコートなども設えることができ若者が楽しむ場所にもなります。



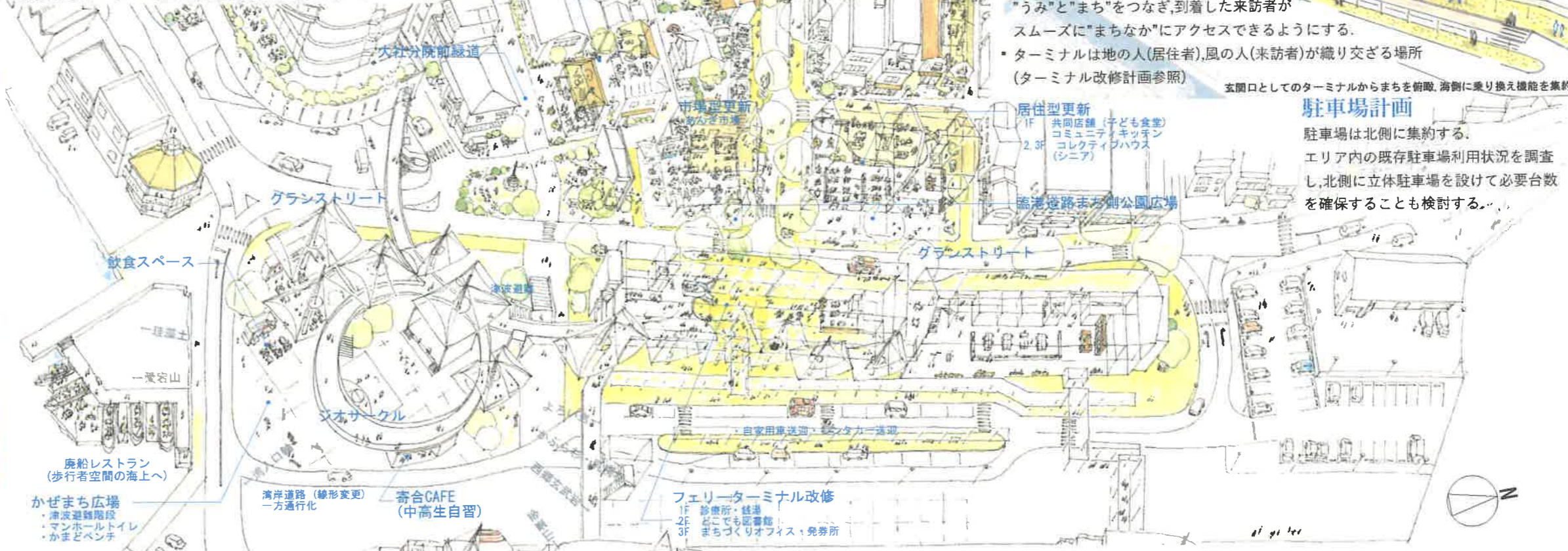
大社分院から海への緑道公園

- 分院は明治以降、灯籠と港を守ってきた。埋め立て後前面が遮られているが、本来の形に近く、前面を海まで開放的な緑道公園とすることを提案する。
- 緑道公園はまちなかの歩行空間に広がり、海への開放感を与え中央の緩い大階段でジオサークルに上ると、災害時の避難経路となる。



一つの「家」としてまち全体で盛り上げる。

「まちなか」は全体を「ひとつの家」あるいは「ひとつのホテル」に見立て、整備していき、地の人(居住者)と風の人(来訪者)が交わる場面や機会・多様な機能・空間を小規模な更新の連続によりつくり、それによる交流・商業・暮らしに活気をもたらす仕組みをつくります。地域コミュニティを踏まえたNPOや一般社団法人などを組織して、商工会、行政、金融機関などと連携し、空き家・空き店舗・空き地等を活用して、店舗、宿泊施設、福祉施設、広場などを街区更新しながら配置することで、まちなかに新たな事業や雇用を創造し、地域コミュニティの再生や若者の地方回帰に寄与する。



防災 フェリーターミナルの健康拠点化+防災拠点化

- ターミナルビルは海に向いていますがまちなかへは狭い歩道にできる入口があるのみです。
- フェリーターミナル1階は「交通結節点となる海側ターミナル」と、「グランストリート」双方の玄関として誰でも利用できるオープンな空間とします。
- まちづくりセンターを置き、進行中のまちづくりのプロジェクトを展示したりします。
- 耐震改修と共に3階には、銭湯と高齢者健康フロアを新設し、日常の生活の場をつくるとともに、非常時の避難所にも利用します(水供給、ソーラパネル設置電源供給)。

交流 にぎわい演出 廃船レストラン

- お魚センター前に八尾川の廃船を利用し、ポンツーンと組み合わせた「廃船レストラン」をつくり、お魚センターの新鮮な魚介料理を楽しむ場をつくる。海上も賑わいの場として、利用できるものを有効活用します。

交通 道路の再編成により交通手段の集約と豊かな歩行空間をつくる

- 国道485線まちなか部と臨港道路を一方道路とし、ターミナル港側道路(一方通行2車線)と大きな乗り換えゾーンを形成する。
- バス・タクシー・身障者乗り場をターミナル側にし、外レーンを一般車用・レンタカー送迎レーンとし、間にキャノピーを設置することで各種交通手段の安全で快適な乗り換え場所を集約する。
- 臨港道路の歩道を1車線分広く(グランストリート化)し、まち側にも広場を設けると、ターミナル、ジオゲートウェイ前に豊かな歩行空間が生まれ、国道の広場道路化と共に、T字型のまちなか中心歩行者空間となり、「まちなか」の小広場も含めて一体的な歩けるまちづくりをおこなう。
- ターミナルの港側に6基の白帆屋根を設け、利用空間を広げ、風の人を華やかに迎える景観をつくる。



交通 歩行空間を核とした様々な交流空間

- フェリーターミナルの改修に伴い、1階中央部を東西貫通できるようにして「うみ」と「まち」をつなぎ、到着した来訪者がスムーズに「まちなか」にアクセスできるようにする。
- ターミナルは地の人(居住者)、風の人(来訪者)が織り交ざる場所(ターミナル改修計画参照)

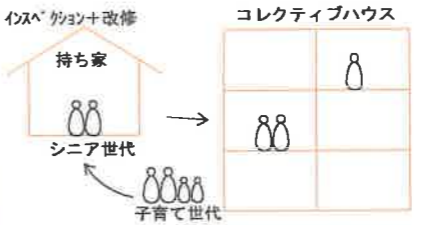
駐車場計画

駐車場は北側に集約する。エリア内の既存駐車場利用状況を調査し、北側に立体駐車場を設けて必要台数を確保することも検討する。

暮らし まちなか再編成による快適な暮らし空間

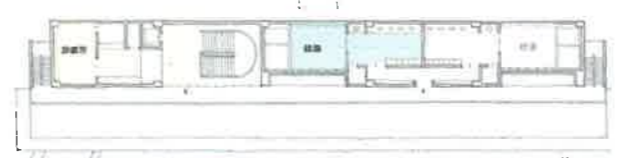
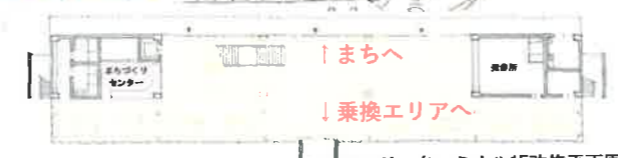
- まちなかエリアは、積極的に既存空き家を改修して、隠岐の島の宿泊施設数を補完するゲストハウスやプチホテルを整備する。
- また、1ター新現住居者や高齢者住居にも適宜利用転換可能なくみをつくる。空き地の一部は、高齢者介護施設や親子支援施設など福祉的な滞在施設としても整備する。
- このように、暮らしにおいても居住者、訪問者が同じエリアに集い、食事、滞在、憩い機能を融合させる。

空家を住みつぐ仕組みづくり



- インバクシヨンの良質ストック住宅に対しシニア世代がコレティブハウスや高齢者施設の入居にあたり必要となる資金の融資を行う
- インバクシヨンの結果による所定の性能向上のリフォームを行った住宅を良質ストック住宅として認定する
- 認定されたストック住宅の評価により担保、家賃、売価を設定する
- 金融機関では「定住促進」と「地域のにぎわいの創造」を目的とした事業に関して、良質な住宅ストック形成につながる物に対して優遇処置が得られる融資制度を新設する。

- ①空き家・住宅ストックの利活用 ②子育て世代の流入
- ③住宅と居住者のミスマッチの解消を目的として
- 1) コレティブハウス・高齢者施設入居時のつなぎ資金の融資
- 2) ストックの質の向上に係わるリフォームを実施する



(参考事例：川崎市小田急沿線既存住宅流通促進協議会)

隠岐の島玄関としての西郷港に相応しい持続可能な街の再生

年間乗降客27万人の港と人口1万3千人の島の核となる街のデザイン
 西郷港周辺地区は、先人たちの築き上げた歴史が集積する地区です。簡単に壊したくありませんし、適切に次世代につながる仕組み作りを行うことができれば、持続可能な街として再生する可能性を有しています。まちづくりの理念を、右に示す6つの方向性によって実現し、みんなで建て替えの方向性を同じくすることで、次世代に向けた同時多発的まちづくりを提案します。

- 交通：ロータリー無きロータリー
- 交流：商業・公共・生活の混在する交流空間
- 商業：あんき市場の移転を契機とする商店街の新しい展開
- 暮らし：住み続ける人々と新しい人達への期待
- 景観：古くからの街区印象の創造的継承
- 防災：防火計画と津波対策、そして避難経路の確保

■ロータリー無きロータリー
 「にぎわい」は狭小性と無縁ではないとの基本理念から、ターミナルを出ると直ちに島一番の商店街という構成を再現したいと考えてるので、ロータリーは採用しません。しかし、乗用車・実用車・公共交通を振り分ける機能は必要だとも考えるので、再生計画の中心を担う、ターミナル前の商店街を一周する道路を巡回路線化し、港と街を分断する事なく、ロータリー機能を成立させます。

■商業・公共・生活の混在する交流空間
 計画地域では、現在の所有者と自治体との協調による再開発の実施によって、多様な規模の賃貸建物が創出されます。今、最初に再開発対象となるであろう周回道路に内接する中心商店街を例にとれば、参入を希望する商業者、必要とされる公共サービスを、現在の土地所有者、居住者、近隣住民、あんき市場の関係者と行政が協調する組織が、交流の場を創出すべく、棟毎に3つの機能が交錯する様に割当てます。そして、徐々にではあっても、周辺の路地や道に人の姿が顕在化する様に誘導します。

■あんき市場の移転を契機とする商店街の新しい展開
 あんき市場の移転は、周回道路に内接する中心商店街に最初に参入する商業者となります。あんき市場の移転は、この再開発の起点であり、その後の展開の成否に大きな影響を与える作業となるでしょう。従って、関係者と行政が協調する組織が、個々の利害を超えて、街の再生のために協力しなければなりません。私達は、あんき市場を中心商店街の適切な街区の複数の棟に、隣同士にならない様に割り当て、それらを繋ぐ道或いは路地を「市場通り」と命名することを提案します。この複数の店舗と「市場通り」が、中心商店街再生の起点となり、他の商業者の参入を促すこととなります。

■住み続ける人々と新しい人達への期待
 中心商店街へのあんき市場の移転と「市場通り」へのさらなる参入者によって、中心商店街は住み続ける方や近隣住民、更には、島民の日々の生活用品の供給源として徐々に成長する可能性があります。また、あんき市場が地産地消の拠点としての役割を担えば、年間5万4千人とも言われる観光客が地産品を土産として購入すべく「市場通り」を訪れる機会も増える可能性があります。更に、適切に配置され、便利に機能する公共サービス棟は、近隣の住民に喜ばれると同時に、人々を島に引き寄せる窓口の役割を担えるでしょう。

■古くからの街区印象の創造的継承
 中心商店街の街割は、過日の商店街のままなので、決して広すぎない道や、本提案によって生まれた新しい路地は、再開発の進展と共に、昔の街の雰囲気や街割を徐々に回復し、島の人々にとっては、その路地機能のみならず、思い出深い景観を彷彿とさせる力を徐々に回復していくでしょう。また、観光に訪れる人々にとっては、島の新しい魅力ある景観として、或いは、京都や金沢や大阪に残る細い路地や狭い道の魅力が、かつては全国の街に日常的に存在した事実と改めて気づく契機となるでしょう。

■防火計画と津波対策、そして避難経路の確保
 当該地域は、1mの津波対策が要請されています。私達は、次の二つの施策を提案します。まず、港側の駐車場には、津波によって駐車場の車が街に流込むのを防ぐべく道路側に防潮堤（1m程度）を設置し、街の再開発に際しては、木造を避け鉄筋コンクリート造を採用の上、開口面積を確保しつつ開口面を限定出来るボックスカルバート型スケルトンを採用し、津波の際に、止水パネルを迅速に設置出来る構成を考えています。また、全ての敷地境界に狭小ながら最低でも1m程度の路地を確保し、災害時に建物の奥まった部分に居た人でも、直ちに道に辿り着けるよう計画したいと考えています。



街区内建物
 建替延床面積 約 5,940㎡

駐車場台数
 町営駐車場1：当初52台→67台
 町営駐車場2：当初40台→40台





路地を散策するイメージ



創造的継承がされた街並みのイメージ



街区割に合わせて変化する路地のイメージ



イベント広場で催しが行われるイメージ

■みんなでまちをつくる～持続可能な街の再生に至る建て替え手法～

私たちが提案する計画は、具体的な間取りやデザイン、用途などを決定した建物によって将来像を示すものではありません。既存の床面積を十分に満たす規模を提案していますが、どの建物を何に使うかは、今後の対話の中で、一緒につかっていきたいと考えます。居住あるいは商いを同じ場所で続けていくことも可能です。空いた、もしくは増えた建物には公共サービスや交流、商業、暮らしに必要な用途が入ることを想定しています。順次建て替えを行えば工事中もエリア内の仮拠点が選べますし、仮拠点を新たな本拠点とすれば、今までいた場所の大家さんとして運用することもできます。

□過去と未来をつなぐ骨格作り

街区の建物は以下に提案する方向性のもと建て替えることを目指します。土地はももとの土地所有者と自治体との共同所有とし、建物の骨格整備は自治体が行います（都市あるいは地域計画としての施策）。その際、建物の外壁線（あらたな歩行空間の創出）と表情（群像として建物の表情を決める）を調整し、持続可能なまちとして再生を試みます。

□都市あるいは地域計画としての施策

原則、現在の区割りごとに、建物の更新が行えるよう、玄関口エリアがにぎわいを取り戻すための仕組み作りをデザインします。

- 方針01 現在の区割に基づき、敷地の半分を自治体買い取ります。
- 方針02 各敷地にスケルトンの躯体+設備インフラを自治体が整備します。
- 方針03 共同所有の敷地所有者は、売却益を糧にインフィル整備も可能です。
- 方針04 テナント招致または、事業を行います。
- 方針05 空き家は自治体が公共サービスを提供するスペースとします。
- 方針06 公共サービス+商業の割合を、少しずつ商業または市場に比重を置くように誘導します。
- 方針07 最終目標は、島民の生活物資の購買地、あるいは観光客の地産物買入れの場として発展することです。

□あらたな歩行空間の創出

建物の配置計画は、以下の基本方針を目安に進めることを提案します。これにより、魅力的な歩行空間を形成します。

- 方針01 敷地境界から建物を後退させ、隣地境界を通路（路地）として、道路境界は歩行空間に寄与する通路として整備します。
- 方針02 建物は、指定建蔽率をできるだけ獲得することを目指します。
- 方針03 建蔽率の2倍を容積率の目標とします。
- 方針04 建蔽率を上回る建設が可能な敷地では、中庭設置など、路地形成に寄与します。

□群像として建物の表情を決める

多様性の中に統一感を持たせるため、現在の街並みからサンプリングした建築の表情を、継承する基本方針とします。

- 方針01 建物は2階建てを基本とします。
- 方針02 1階はRC壁構造とし、道路側は木製建具を採用します。
- 方針03 妻入、平入、看板の3タイプの外観の表情を踏襲します。
- 方針04 間口は6m程度を一つの単位として外観を形成します。
- 方針05 路地の歩行空間を護るため、屋外機等は2階高さに設置します。
- 方針06 各建物は路地側からも出入り可能なよう考慮します。
- 方針07 庇等の出は1m程度を最大とします。

各機能の連携を深めるための手法に対する提案：みどりでつなぐ/台地とつなぐ/柔軟な交通結節点の構築

整備する施設の利活用や運営に対する提案：利用者変化を受容する場へ/小さな集合体を大きく使う

にぎわいを演出する手法などの提案：必要な規模を選択する/歩く人がみえる街

デザイン・独創性に対する提案：小さなイベントを楽しんだ成長期を彷彿とさせる街へ/

仮設の本設化と、その結果として生まれる松林の港

■みどりでつなぐ

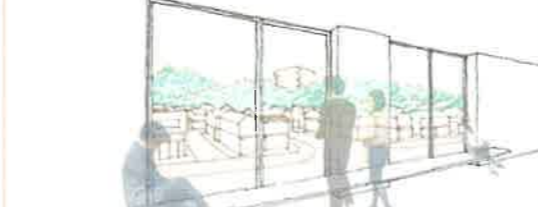
スカイブリッジを撤去し、防潮堤とともに、みどりとベンチを同時に整備します。そのみどりが港湾道路周辺の既存施設周辺にも表れ、一目で連携を認識できるように提案します。



うみとまちをつなぐランドスケープのイメージ

■台地とつなぐ

フェリーターミナルは、第一に島との出会いを担ってほしいと考えるので、フェリーを降りたら、まちと台地が一望できるようにします。観光客は島の構造を理解し、災害時には直感的にどこが高いのか把握します。反対に、まちからはフェリーと海への意識が想起されます。



フェリーターミナルから街と台地を望むイメージ

■柔軟な交通結節点の構築

街区を周回道路にすることで、まち側に車両乗降場を設けることが、従来より容易になります。現在の交通機能配置はターミナルエリアについての意見交換会での結果をもとに配置していますが、今後、観光バス降車場をまち側に移動し、にぎわいと商業の助けとすることも可能です。交流空間の近くにバス停を設ければ、室内でバスを待つなどの連携もできます。また、港湾道路に沿った緑地を整備され一体感を獲得したのち、隠岐汽船貨物扱所付近に遊覧船の乗降場を提案します。みち・かわ・台地をつなぐ種を配しておきたいと考えます。

■歩く人がみえる街

建て替えが進んで来たら、街区を構成する周回道路や県道以外の道路を、時間や車両を限って歩行者専用の時間帯を設けることを提案します。歩きやすくなり、にぎわいの一助となります。

■小さなイベントを楽しんだ成長期を彷彿とさせる街へ

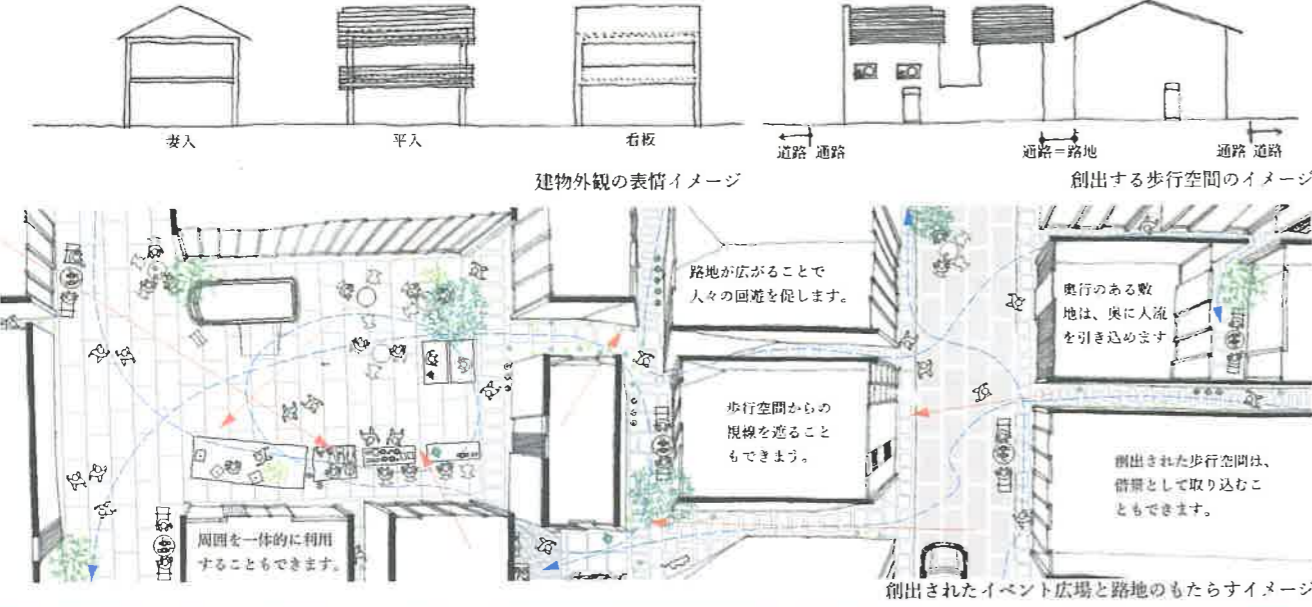
私達が提案する再開発の結果生まれる街は、近代化された新しい姿ではありません。低層な独立棟が路地を介して林立する構成は、寧ろ、昭和の商店街に近いからです。しかし、昭和の街が火災にも水害にも弱く、些か脆弱な構造であったのに対して、この街には、控えめながら防火対策と津波対策が施されています。ここに、私達が、創造的継承と呼ぶ所があります。成長期の商店街には、活気はあったでしょうが、広場の確保は難しかったのではないのでしょうか。従って、その活気は全て、路地や道に溢れる人々の日常の往来によって表現されていたのではないのでしょうか。これからは商店街では、その様な表現は期待できませんが、小さな広場は確保出来ます。そこでは、街が計画するイベントが、小さな祭りの様に繰り返されるはずで、イベント会場には、例えば、毎年コンペで仮設テントのデザインを公募し、それ自体が若いデザイナーの登竜門となり、それを見にくる人もいる様な催し物になることも期待できるでしょう。

■仮設の本設化と、その結果として生まれる松林の港

私達は、西郷港を徐々に「松林の港」へと変身させていきたいと考えていますが、この計画には、二つの段階があります。第一段階は、二つの対象に対する二つの手法です。まず、重力式岸壁（ケーソン式）については、地上面に構造上問題の無い適切な開口を設け、土木・造園関係者の協力を仰ぎながら木の植樹を開始すべく努力したいと考えています。しかし、これはこの大プロジェクトのプロローグに過ぎません。本計画予算には含まれませんが、私達はその後、重力式岸壁（ケーソン式）への木の植樹を継続し、その延長上に設置されたプレキャスト組立式PC棧橋及びジャケット式岸壁の柱脚が鉄骨造である事実に鑑み、これが有効に機能している間に、その下を埋立てる事を提案します。その埋立の結果、長期的には耐久消費財に過ぎない港湾施設を、強靱な国土へと転換し、その成果として、西郷港前面が松林に覆われ、新しいランドマークの創生を実現する可能性を模索したい。

■最後に

再開発は、それがどのような内容でも再考すべき場面が現れる可能性があります。私達は、その場面を次の様に考えています。それは、再開発の目標である「商・公・住が混在する中心街」という構成が実現せず、公共サービスを提供する棟が支配的になりすぎた段階です。その様な段階に立ち至ったら、再開発の手法や方向性を再考すべきではないか、そう考えています。



建物外観の表情イメージ

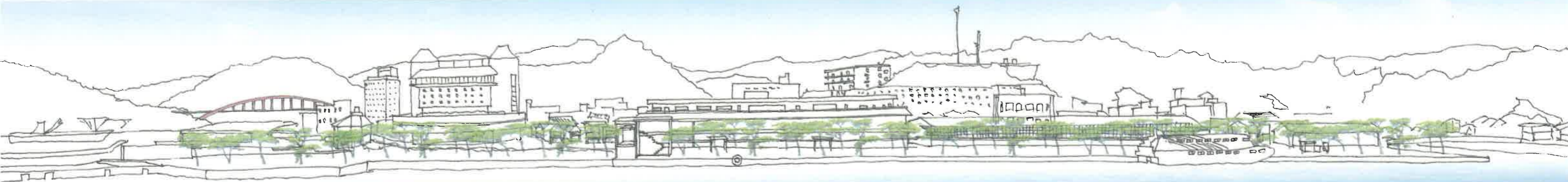
創出する歩行空間のイメージ

創出されたイベント広場と路地のもたらすイメージ

■必要な規模を選択する

にぎわいは、多少の混雑を伴います。広場を設ける、また、部分利用できるように計画した大きい建物を設ける場合、大人数が集まることでしかにぎわいを演出できません。本計画では、特別な手法を用いずとも、小さい規模で混雑が生まれるので、そこかしこで小さいにぎわいが生まれる可能性が十分にあります。もちろん、連携して、大きいイベントの運営も可能です。

路地を横丁のように使った際のイメージ



松林に覆われた西郷港玄関口エリアのイメージ